

- 神 楽 名 ^{くろくち} 黒口神楽
- 伝 承 地 黒口地区
白杵郡高千穂町大字上野
- 指 定 等 国指定重要無形民俗文化財
- 伝承団体 黒口神楽保存会
代表 興 梶 賢治



八鉢

□神楽の概要・由来・その他

黒口神楽は高千穂神楽の^{かみの たばる}上野・田原系統に属する神楽である。黒口は、^{かみの}上野地区の西側に位置する世帯数63戸の集落で、夜神楽は神社の氏子主催で行われている。古武道である「戸田流棒術」が江戸時代から盛んに行われ、「戸田流の里」として練習場が大切に保存されている。

^{うじがみしや}氏神社である「^{くろくち}黒口神社」は、^{あめのむらくものみこと}天上界の水種を司る天村雲命が、牛に乗り高天原からこの地に降りられたと伝えられる。また別伝として^{じっしやだいみょうじん み けいり のみこと}十社大明神三毛入野尊の御子・^{さぶらう}三郎天神が牛を連れてこの地に来られ、^{おぞらてん}宮居を建立されたとあり、古くは「^{おぞらてん}大空天神社」、「^{さぶらうてん}三郎天神社」と称された。神社再建の歴史は古く、天歴9年（955）の^{むなふだ}棟札があり、現在の社殿は寛政5年（1793）に建立されている。本殿の^{ひだりわき}左脇障子には、牛を連れた^{あめのむらくものみこと}天村雲命の彫刻があり、本殿正面の^{かいば こうはいりょうはしら}海馬、向拝両柱の昇り龍・降り龍など、多彩な彫刻が施されている。伝えでは、夜な夜な龍が柱を抜け出し付近の作物を荒らしたため、色彩を剥がし、目を繰り抜いたという。

□芸能の機会・場所

- 黒口夜神楽

11月24日～25日 黒口神社にて神事後、公民館にて奉納

- ^{にいなめさい きいたんさい}新嘗祭、^{くちあ}歳旦祭、太鼓の口開け、^{しきさんばん}春の大祭に「式三番」などを奉納

□演目一覧

宮神事	^{ごしんこう} 御神幸	^{ひこまい} 舞込み	^{み こ や ほ} 彦舞	^{たいどの} 御小屋誉め	^{かみおろ} 太殿	神降し	鎮守
^{すぎのぼり} 杉登	^{ちがため} 地固	^{やつぱち} 八鉢	^{たちかんぜ} 太刀神添	^{やまもり} 山森	^{しちきじん} 七貴神	^{ひかんぜ} 幣神添	^{ちわり} 五穀 地割
^{ごしんたい} 御神体	^{いわくぐ} 岩潜り	^{ぶち} 武智	^{そではな} 袖花	^{だいじん} 大神	住吉	^{おきえ} 沖逢	柴引き 伊勢
^{たぢからお} 手力男	^{うずめ} 鈿女	^{とと} 戸取り	^{まいびらき} 舞開	^{しめぐち} 注連口	^{くもおろし} 雲下し		

※平成27年11月の神楽奉納番付に基づく

□演目の特徴

前半は、祓い清めの舞や諸々の神を招く舞が続く。「大神」は、麻の神徳、呪力による祓除招福の神楽で、願掛け願ほどきで萬事を司る大事な神楽といわれ、舞の終了後、神職、舞人により、四方・中央に三度の拝礼が行われる。また「地割」は山神が、耕地の割り替えを行う神楽で、竈祭の神楽としても奉納される。はじめに台所で神事・杯事の後に、神主、太刀・弓の正護と荒神が舞込む。上野・田原地区では、この時、台所役の女性が荒神の袴裾を引っ張り、邪魔をして笑いを誘う。舞の終了後には神主・荒神の問答が行われる。

夜明けには「岩戸開き」の神話にちなんだ「岩戸五番」が奉納され、最後に「注連口」「雲下し」で神々を送って終了する。

□その他の特徴

- 面：猿田彦、入鬼神、地割荒神、七貴神、御神体、柴引き、鈿女、戸取 等
- 楽：太鼓、笛
- 装束：白衣、白袴、素襖、千早、裁着袴、毛笠、どっさり、ホカケ烏帽子、天冠 等
- 採り物；鈴、榊、舞扇、御幣、杖(荒神杖等)、弓、矢、刀、折敷、札板、帯 等
- 文書：「天石屋戸之伝」巻物(明治37年)、「御神楽御神講屋控帳」(大正4年)等が保管されている。

□伝承の現状・課題

以前は神社の神楽殿で神楽を奉納していたが、見学者が増えたため民家を神楽宿とするようになった。その後、高齢化、住宅構造の変化、見学者のマナーの低下などの理由で、現在は公民館で奉納されている。黒口神楽保存会の会員は小中学生を含む19名で、舞い手、村役目とも高齢化による今後の後継者不足が心配される。



大神



地割



戸取